

研究会報告

第 68 回 東京医科大学循環器研究会

日 時 : 平成 30 年 5 月 19 日 (土)

午後 2 : 00 ~

場 所 : 東京医科大学病院 第一研究教育棟
3 階

当番世話人 : 誠潤会水戸病院 土田 博光

1. 肺カルチノイドの経過中に急性心不全を発症した 1 例

(東京医科大学病院 循環器内)

嘉澤 千文、武井 康悦、後藤 雅之
池田 和正、可見 純也、伊藤 亮介
藤井 昌玄、中野 宏己、近森大志郎

(東京医科大学病院 呼吸器・甲状腺外科)

古本 秀行、今井健太郎

症例は 63 歳女性。50 歳時から肺カルチノイドの診断で呼吸器外科にて左肺下葉切除術を受けたが、4 年後に再発し多発肺転移を認めた。以降は放射線治療と化学療法を受けたが、2014 年に気管内に腫瘍浸潤のため気管支鏡的切除術をうけ、以降も呼吸器外科通院中であった。2018 年に就眠中の突然の呼吸困難発症のため当院救命センターに搬送、急性非代償性心不全のため気管挿管され、集中治療管理となった。心エコー検査で高度な僧帽弁肥厚と逆流および高度な三尖弁肥厚と逆流を認めた。また大動脈弁からも高度な逆流を認めた。各弁は肥厚とともに短縮所見もあり慢性炎症的な所見であった。カルチノイドは右心系弁膜症の要因となりうるが、本症例は左心系弁も異常所見があり、文献的考察を含め症例報告する。

2. 予後不良と考えられたが救命しえた先天性横隔膜ヘルニアの一例

(東京医科大学 小児科学分野)

羽生 直史、奈良昇乃助、渡邊 由祐
西袋麻里亜、西端みどり、春原 大介
林 豊、河島 尚志

先天性横隔膜ヘルニア (CDH) の死亡率は未だ高い。出生前診断の進歩により CDH の多くが出生前管理されるようになったことで術前後の循環管理が重要視されている。出生前診断なく、血生化学的検査から予後不良と考えられたが、術前後の厳密な循環管理によって救命しえた CDH を経験したので報告する。

症例は、他院で出生した在胎 39 週 6 日、出生体重 3,609 g の正期産児。生下時からの著明な呼吸障害のため当院に搬送され、レントゲン所見から CDH と診断した。肺低形成に伴う遷延性肺高血圧症のため、肺体血流の維持に難渋した。高頻度振動換気 (HFO)、一酸化窒素 (NO) 吸入療法、昇圧薬や volume expander 投与をはじめとした厳格な呼吸循環管理を経て、日齢 3 に外科的根治術が施行された。術後も呼吸循環動態は不安定で、継続管理を要したが、緩徐な安定化を得た。最終的に在宅 CPAP 導入のうえ日齢 109 に退院した。

3. 当院で経験したリードスペースメーカー植込術 5 症例についての検討

(東京医科大学八王子医療センター 循環器内科)

大西 将史、池部 裕寧、大嶋桜太郎
富士田康宏、外間 洋平、寶田 顕
高橋 聡介、相賀 護、西原 崇創
渡邊 圭介、田中 信大

本邦でも 2017 年 9 月より保険適応を取得したリードスペースメーカーは、従来型ペースメーカーと比較して、皮下ポケット作成や経静脈的リード留置に伴う合併症の回避が可能という利点を有するため、さらなる症例数の増加が期待される。一方、リードスペースメーカー留置後の長期予後は未解明だが、手技・デバイス関連合併症の回避が留置後転帰の改善に寄与する可能性が期待される。今回、我々は 2018 年 3 月より 1 ヶ月間でリードスペースメーカー留置に至った 5 症例を経験した。5 症例の平均手技時間 39.6 分、平均透視時間 12.4 分と、従来のリード留置型 (平均手技時間 103 分、平均透視時間 22.4 分) と比較して著明な時間短縮が可能であった。1 症例のみ術後ペーシング閾値の上昇を認めたが、手技関連の要因は否定的であった。

心房ペーシングが不要な症例での最低心拍数の確保において有用と考えられる本デバイスの、当院での経験症例につき考察を加え検討した。

4. The utility of combo wire for the evaluation of symptomatic ischaemia in the case with coronary artery ectasia

(立川総合病院)

田谷 侑司、佐藤 貴雄、鈴木 尚真
湯浅 翔、越川 智康、布施 公一
藤田 聡、池田 佳生、北澤 仁
高橋 稔、岡部 正明、相澤 義房

冠動脈拡張症とは Morgagni による報告が最初と言われており、これまで冠動脈拡張症患者の心筋梗塞に対する抗凝固療法の有効性の報告などはあるが、有意狭窄を認めない症例の胸痛発作への治療に関する報告は少ない。